

ある遺品整理の顛末

ウガンダ東部トロロ県 A・C・K・オボス=オフンビの場合¹

梅屋 潔 (神戸大学大学院)

【論文要旨】

私はここ 10 年ほど、アドラ民族出身でアミン政権 (1971-1979) 閣僚だった故オボス=オフンビの「遺品整理」とでもいえるような作業を行っている。彼はアミンの側近でありながら、ついにはその命令で殺害された人物である。出身地域で随一のエリートとして評価される一方、その生涯はティボ *tipo* (殺害された者の死霊) やラム *lam* (呪詛) そして予言者などの観念で彩られ、両義的な評価を付与されてきた。彼は民族最初の民族誌の著者であり、国防大臣として軍の兵舎を誘致し、父の墓を二度建てかえ、その名を冠したチャペルを建造した。邸宅には当時を知る手がかりとなる数多くの遺品が残っている。偶然から始まったこの人物への関心がアドラ民族の世界観への理解を深めることはもちろん、地域から見た世界史、そしてその手がかりとなるモノへの関心に繋がるようになった軌跡を辿る。

【キーワード】 ウガンダ・アミン政権、オボス=オフンビ、遺品整理、地域から見た世界史

①はじめに

1997 年 3 月から、私は、ウガンダ東部のケニアとの国境の街マラバにほど近い、現在のトロロ県を拠点とするアドラ民族の間で社会人類学的調査を続けている。私が本稿で試みるのは、私の現在の調査・研究の一部をなしている、アドラ民族出身で国務大臣²を務めた人物の「遺品整理」の中間報告である。その人物とは、アルファクサド・チャールズ・コレ・オボス=オフンビ (Arphaxad Charles Kole Oboth-Ofumbi 生没年月日は 1932 年 7 月 12 日-1977 年 2 月 17 日)。日本でもよく知られているイディ・アミン政権³の閣僚だった。アミン大統領の命令で殺害されたと

¹ 本稿所収の写真等は、オフンビ家の許可を得て撮影・複写し、公開の許可を得ているものである。

² 国防担当大臣 (1971)、国防大臣 (1971-1973) 閣外大臣としてインド人管理庁 (1974-1975)、財務大臣 (1975-1976)、内務大臣 (1975-1977) を歴任した。Jorgensen, Jan Jelmert, 1981, *Uganda: A Modern History*, London: Croom Helm Ltd.

³ 彼があるときから自称し、他にも強要した呼称は His Excellency, President for Life, Field Marshal Al Hajji Doctor Idi Amin Dada, VC, DSO, MC, Conqueror of the British Empire in Africa in General and Uganda in Particular。幼名をイディ・アウオ=オンゴ・アンゴ=イディ・アウオ=オンゴ・アンゴ。生年については諸説あり、1924、1925 年あるいは 1928 年という記述もある。西ナイル県とスーダンの国境近辺のコボコ出身といわれる。カクワ人の父とルグバラ人の母の間に生まれた。民族をまたがりイスラム教を紐帯とするコミュニティ、通称ヌビとし

言われている。ここ 10 年ほど私の調査の焦点となっている人物である。その経歴についてはおおい触れるとして、まずはこの人物に関心を持つようになった経緯から記しておきたい。

1999 年のある日のことだった。私の調査基地のあるグワラグワラ村を訪ねてきた人物がいた。ニャマロゴ村から来たという。男は私の調査目的を尋ね、アドラ民族の歴史・文化・言語だと知ると、「そんなことならオボス=オフンビの本を読めばすべてわかる」と言った。

首都カンパラのマケレレ大学で作成した文献目録を繰ると、確かにそれらしい文献があらわれた。『パドラー=アドラ民族の歴史と慣習』(以下本稿では『パドラー』と略す) というその書物は、東アフリカ出版局から 1960 年に出されたものだった⁴。アドラ民族に関する先行研究の多くにこの文献が引用されていることに気がついた。

この書物は現地語で書かれている。アフリカ歴史学の泰斗オゴト⁵は、自分の研究の出発点にこの著作の英訳を用いており、「パドラー歴史的テキスト」⁶として引用している。資料の出所は「著者所蔵」とされ、しばらく手を尽くしたが入手できなかった。

オボが私に貸してくれたタイプスクリプトに興味をそそった。著者はエイダン・サウスオール (Aidan Southall 生没年月日 1920 年 7 月 20 日-2009 年 5 月 17 日)。著名な社会人類学者で東アフリカ社会調査研究所 (1970 年、東アフリカ大学マケレレ・カレッジからマケレレ大学への再編時にマケレレ社会調査研究所と改称) の所長を務めた人物のものだったのだ (在任期間は 1957-1968)⁷。

て育った。1946 年より KAR (King's African Rifles) に在籍し、ビルマ戦線に参加、1949 年の世界大戦終戦まで前戦にいた。マウマウ運動鎮圧にも参加 (1952-56)。中尉となり、保護領時代ウガンダ人としてただ 2 人大英帝国より将校の職権を与えられていた。VC (Victoria Cross) はヴィクトリア十字勲章、DSO (Distinguished Service Order) は殊勲章、MC (Military Cross) は、従軍十字勲章の略。大統領としての任期はシンガポールにおける英連邦会議出席中のオボテ大統領からクーデターにより政権奪取した 1971 年 1 月 25 日からオボテ元大統領がタンザニア軍の協力を得た反乱軍によって敗走する 1979 年 4 月 11 日まで。その後サウディ・アラビアに亡命。亡命時の約束を遵守し長らく沈黙を守った。2003 年 7 月下旬危篤が伝えられた。当時その体重は 220 キロを上回っているといわれ、透析しながら意識不明と回復を繰り返し、二回の腎臓移植を敢行するが功を奏さず、2003 年 8 月 16 日午前 7 時 (東アフリカ標準時間) 死亡。

⁴ Oboth-Ofumbi, Arphaxad Charles Kole, 1960, *Padhola: History and Customs of the Jopadhola*, Nairobi, Kampala & Dar es Salaam: The Eagle Press, East African Literature Bureau. 2005 年ごろ、オフンビ家により復刻版が出された (復刻版に出版年の記載なし)。

⁵ Ogot, Bethwell Allan, 1967, *History of the Southern Luo, Vol.1: Migration and Settlement 1500-1900*, Nairobi: East African Publishing House.

⁶ 上掲書随所に *Padhola Historical Text* として引用されている。

⁷ “Padhola: Comparative Social Structure” と題するもので、ことア

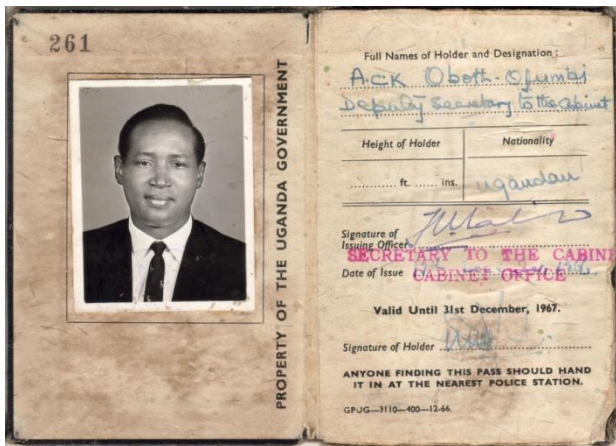


写真1 オボス＝オブンビのIDカード（内閣副書記官在任当時のもの）オブンビ家蔵

のちにマケレレ大学中央図書館でコピーを入手した私は、何人かのアドラ人に頼んで『パドラ』の翻訳作成に着手した。私のアドラ語運用能力では、一冊の書物を訳すことはかなわなかったからである。この翻訳はかなりの時間を要したが、現在手書きのかたちで完成された二つのバージョンが手元にある。

それから私はしばしば、従来の調査項目に加えて、オボス＝オブンビの名前を出し、彼についても尋ねることにした。

あるときは、村人が「彼はアフリカ人だがとてもカラフルだった」と了解困難なことを教えてくれたりした。何度聞き返しても、「黒人だからこそカラフルなのだ」とはぐらかされた。今思うとお洒落だった、というような意味合いだったようにも思う。

たびたび身の回りのことをしてくれているグワラグワラ村のオシンデ氏が遠い親戚だということや、風の便りに聞いたのだろう、オボス＝オブンビの写真が掲載された、風雨にさらされてぼろぼろになったリーフレットを持ってきてくれる村人がいたりもした。

何らかのかたちでこの書物の著者やその調査状況を知りたいものだ、と考えた。

この民族に関する限られた先行研究のうち、重要な物のひとつにクラッツォララ神父の「ジョパドラ」⁸がある。私はこの本

ドラ民族に関わる諸研究では比較的多くの先行研究に引かれてはいるが、未刊行である。1957年1月、東アフリカ社会調査研究所での会議での報告論文と末尾にある。私の見たものには丁寧に鉛筆で下線が引かれ、「この部分には同意する」といった書き込みが見られた。のちに触れるオボス＝オブンビの日記とおなじ筆跡で書き込みがされている箇所は、「すべてのクランがアドラという名の伝説的な始祖の二人の妻のうちどちらかの子孫であるというクラッツォララが記録した伝承を、聞いたことがない」という部分。

⁸ Crazzolar, Joseph Pasquale, 1951, "Jo-P'Adhola," *The Lwoo Part II: Lwoo Traditions*, Verona, pp. 315-323. 大著『ルウォー第二部—ルウォーの伝統』のなかのわずかに9頁をしめるものであるが、そ

の著者、オボス＝オブンビは、クラッツォララ神父の調査協力者だったのではないかと考えていたのである⁹。



写真2 オボス＝オブンビとアミン、蜜月時代 オブンビ家蔵

驚かされたのは、私が漠然と民族誌家だと考えていたその人物の名前を、一定年齢以上の人はほとんどが知っていたことだ。近くの小学校の出身者は、彼は大臣だった、という。授業で習ったのだと。正確なことがわかったのはその小学校の校長だったバジル・オケチョ氏に話を聞いた時だ。彼はアミン政権時代の国防大臣であり、政府転覆の濡れ衣を着せられ遂にはアミン大統領に抹殺されたのだ、という。私は一気に熱がさめたような気になった。今考えると狭量だが、そのようなスーパーエリートが民族誌的な研究の対象にはなるはずがない、と考えたからである。また、同時に、当地でのカソリックとプロテスタントの熾烈な勢力争いの歴史を知るにつれ、クラッツォララ神父との協力関係はなかった、との考えに傾いていったことも、熱が冷めた一因であろう。

の重要性は今日なおはかりしれない。Jo-P'Adhola は、接頭辞と名前の由来を反映したある意味では非常に正確な記述方法であるが、猥雑でもあるし、既に現地の英字新聞で Jopadhola が普通に用いられていることもあって、ここでは採用しない。

⁹ 梅屋潔, 2002, 「民族誌家と現地協力者—ウガンダ東部パドラにおけるクラッツォララ神父とオブンビ親子の場合」『哲學』第107集, 233-260頁、慶應義塾大学三田哲学会。



写真3 私がすみこんだグワラグワラ村トレーディングセンター

② 国務大臣と死霊、そして予言者

ところが、あるとき、私の研究の相談に乗ってくれていたある年長者に話を聞いてから、事態は一変した。彼が死んだのは、ティポ *tipo* (死霊、とりわけ他人に殺害された人の霊)¹⁰のせいだ、というのである。あるいは、並外れた出世がかなったのは予言者の力だ、という噂も伝わってきた。

ニャマロゴ村のオボス＝オフンビ邸には、夫人が住んでいるという。

村の人に相談すると、あの屋敷には決して行ってはいけない、ろくな死にはしないから、と皆に引きとめられた。連続して変死した人が3人もいる、というのだ。ひとりには蛇に咬まれた、という。蛇に咬まれて死ぬ、という死に方を彼らはきわめて不吉な兆しと考えているようだった。こうしたいくつかの出来事は私に、一見なじまないけれども、このアドラ民族随一のスーパーエリートと死霊の観念、そして予言者との関連を予感させることになった。

少し本腰を入れようと、グワラグワラ村の人に最初に紹介してもらったニャマロゴ村のオボヤ氏も、決して私自身が村に行っただけでいい、と助言した。その代わりに、オボス＝オフンビの噂を自分が集めておく、自分はトロロの街にあるアイスクリーム屋で働いているので、毎日グワラグワラを通るから、調査結果を今度持ってきてあげよう、と。ありがたい申し出だった。

そういったわけで1999年の調査時には、私はニャマロゴの邸宅を訪れていない。実は一度だけ訪ねようとしたことがある。その時は、門番の男に追い返された。けんもほろろ、という印

¹⁰ ティポは、日常的には「影」あるいは「陰」を意味するが、写真に写った姿や水鏡にうつった姿 *chal* もティポという人もいる。近隣のランギの民族誌を読むと、「霊 *spirit*」という訳が見える (例えば Hayley, T. T. S, 1947, *The Anatomy of Lango Religion and Groups*, Cambridge: Cambridge University Press)。アドラの特徴は、殺害された者の霊に限定されていることである。

象だった。しかしこのとき、私は人々が口を閉ざす原因の一端を知ったような気がした。グワラグワラと同じく、ニャマロゴの辺りは典型的な農村で、地区の役場を除くと建物は伝統的な草ぶきで土塀の小屋ばかりだ。そのサバンナの真ん中にオボス＝オフンビの二階建て総レンガ造りの邸宅がそびえていたのである (写真4)。自邸に隣接した敷地には、自分の父親を記念するチャペルがみえる (写真5、6)。

しかも、近隣の話を知るとこのあたりはすべてオフンビ家の土地なのだという。ヘリコプターや小型航空機が発着できる空港を含め300エーカーほどある、という¹¹ (写真7)。

そんなエリート一家にはつてはない。しかも次に調査結果を書き記したノートを持って来た時にニャマロゴ村のオボヤ氏は言った。「あれだけ忠告したのにあそこへ行った。みんなもう知っているよ。もう協力はできない。」そうこうするうちに私の調査資金はつきた。1999年3月に帰国¹²。



写真4 サバンナに聳えた現在のオボス＝オフンビ邸



写真5 邸宅に隣接するセム・K・オフンビ記念チャペル

¹¹ 後に遺族に尋ねたところでは実際は2,000エーカーあまり。剥奪されている意識を持つ人びとの記憶より、7倍近い面積を誇っている。

¹² この間のさまざまなことどもについては、梅屋潔, 2007, 「アチョワ事件簿—あるいは「テソ民族誌」異聞『アリーナ』第4号、328-46頁、中部大学国際人間学研究所、参照。



写真6 白いタイルが貼られているのは、アミンの置いた礎石



写真7 1971年4月25日、アミン大統領を乗せた専用ヘリがオフンビ家敷地に着陸する¹³ オフンビ家蔵

オポヤ氏の聞き書きは興味深いものだった。オボス=オフンビの死は父の代からの、日本語に無理に訳すなら「因縁」あるいは「祟り」によるものだというのである。

オポヤ氏の調査記録からは、オボス=オフンビの父、セム・コレ・オフンビ (Semu Kole Ofumbi c.1904年-1951年4月5日、写真8) が、1890年から1920年のあいだにガンダ王国へ厳しい徒歩の旅をしておもむき、そこでアングリカンと出会ったこと、その後ブラシの神学校で学んだこと、1944年の「マウエレの飢饉 *Kech Mawele*」と呼ばれる飢饉のときには、白人宣教師レヴランド・ランプレーを助けて海外からの援助物資の配給に尽力したことなどが伝えられる。ガンダ王国への旅が当時厳しいものだった様子が窺われる。焼いたキャッサバやすりつぶしたゴ

¹³ セレモニーのあとカンバラに帰ろうとしたがヘリは故障し、飛び立たなかった。アミンはやむなく自動車でカンバラに帰投している。この出来事が印象的だったために、村にはこのことがアミンのオボス=オフンビへの疑いの源泉である、とする者もいるが、ゴドフリー (後出) は、この後二度オフンビ家を訪れ、宿泊すらしていることを指摘し、その説を否定した。

マなど腐りにくい食料を携行していったものらしい¹⁴。問題はその後



写真8 セム・コレ・オフンビ (左はオボス=オフンビ、右は妻アロウオ) オフンビ家蔵

…1944年の飢饉のさなかのことである。その運命的な夕方が訪れたのは、セム・コレ・オフンビは、ムルカ (*muluka*: parish = 地区)・チーフ¹⁵のカム・オボスという友人と歩いていた。帰り道、教会の管理しているキャッサバの畑を見回ることにした。そこで彼らは、若い同僚がキャッサバを畑から掘り出し、頭陀袋に詰め込んでいるところを見つけてしまった。セム・コレ・オフンビは彼をその場で殺害した、といわれている。一緒にいる友人が手を貸したのかどうか、あるいはどのように殺害したのかは伝えられていない¹⁶。ただ、セム・コレ・オフンビがその後生涯アルコールを遠ざけたことは、よく知られている。この事件は、どういうわけかほとんど問題にされなかったらしい。地域住民は亡くなったオクム¹⁷という男を

¹⁴ 後に得た資料によると、若いころ兄のひとりバトルマーヨー・オロー・ジャッポとともにブガンダに出稼ぎに行き、CMS (Church Missionary Society) および NAC (Native Anglican Church) より信徒奉事師の資格をとり (1919)、1930年までブガンダで布教。1931年から1946年までは、トロロで布教活動に従事し、その間ブラシ・カレッジにも通っている

(1933-1935)。資料は、*The Form and Order of Memorial Service of Semu K. Ofumbi at Korobudi, Mulanda and The Service for the Consecration Dedication and Blessing of Semu K. Ofumbi Memorial Chapel St. Paul's Church, Nyamalogo, Mulanda*, n.d. [以下 FOMS と略す] Entebbe: Government Printer, pp.1-8. グワラグラ村の住人がもってきてくれたリーフレットはこの一部であった。

¹⁵ 以下、本稿ではディストリクト District を「県」、カウンティ County を「郡」、サブカウンティ Sub-county を「準郡」、パリッシュ Parish を「地区」、Village を「村」と訳す。

¹⁶ 子供が袋たたきにした責任をとったのだ、という説も後に聞いた。また、この時代は保護領時代でもあり、見逃されることはありえない、という見解もある。

¹⁷ オクムという名は、生理が止まらないまま生を受けた子供に

追悼する歌を作った。「オクムを殺したキャッサバ *Mwogo neko Okumu*」と題するその歌は、一時は近隣で機を捉え頻繁に歌われていたという。その後もセム・コレ・オブンビが教会付属の学校で働いていたのかはわからない¹⁸。人々は肝心のところになると警戒して口をつぐんでしまう。セム・コレ・オブンビはやがて病を得て 1950 年に亡くなった¹⁹。まだ 42 歳だった。彼の死にはミステリーがつきまとっている。誰かを殺害すると、その人の死霊、ティボが家までずっとついてくる。殺害者が最初に会った人、最初に入った小屋、遺体を最初に発見した人、それらの人々は、みなティボにつきまとわれる。このティボはおそろしく強力で、いかなるジャシエシ (*jathieshi* 主に霊的な問題を扱う施術師) の浄化儀礼も効き目が無いといわれている。ひとたびこれに取り憑かれたら、世代をこえてその被害は続くのだ²⁰。…

死霊、予言者、祟り。私が関心を持つことの多くがこのオブンビ家には集約しているように思われた。私は、この家族を追ってみようと考えたのである。

③再訪

幸い調査資金を得ることができ、気を取り直して翌 2001 年に立てた研究計画は、オボス＝オブンビとはどういった人物だったのか情報を集める、といういままでとは全く別なものだったが、意外なことにその年の計画はグワラグワラの村人もおおいに興味を持ってくれた。二人の住民が調査を手伝ってくれることになった²¹。この土地には今でもオボテ元大統領が党首をつとめていたウガンダ人民会議 (UPC: Uganda People's Congress) の支持者だった人が多く、70 年代の政治史と地域出身の大臣について知りたかったようだ。

2001 年 8 月 6 日、村のぼろぼろの自動車をチャーターして、私と 2 名の調査協力者 (アレックス・オコンゴ氏とジョセフ・オマディア氏) はニヤマロゴを含む (と思っていた) ムランダ準郡のチーフを尋ね、研究計画を説明した。チーフも、突然行かないほうがいいだろう、まず、この準郡で隣接しているコロブディ村の議長を尋ねたらどうか、と助言し、何人かの長老の名を口にした²²。知らなかったのだがニヤマロゴはムランダ準郡

名づけられる。双子ほどではないが、ある意味で神秘的な含意がある。

¹⁸ 実際には教会を辞している。

¹⁹ 前出資料 FOMS によれば、正確には 1951 年 4 月 3 日。

²⁰ 一説によると 7 世代とも。

²¹ これまでの伝統的病いやその治療方法についての調査は、現地ではお退屈なものと考えられていたらしい。おそらくその一因は、彼らにとってあたりまえのことを一から尋ねられるからだろう。

²² このときにニイレンジャ・克蘭のリーダーとしてカプル (後出) の名をメモしてあったのに気づいたのは本稿執筆時のことである。

ではなくナブヨガ準郡に編入されていた。ナブヨガには知人もいないし、宿舎からも 15、6 キロほど距離があるので、暗澹たる気持だった。コロブディ村の議長、オベリ・ヤイロ氏、その父でオボス＝オブンビ家の警備をしているというヤイロ・オウオロ老 (80 歳) の口も固かった。やはり、ここでの調査は無理なのか。

幸運もあった。調査を手伝ってくれているオマディア氏が、「是非会わなければならない人がいる」というのでナブヨガ準郡のミガナという村に行ってみると、そこはイキロキ儀礼 *yikiroki* (埋葬儀礼) の真つ最中だった。私が「会わなければならない」のではなく、彼が「出席しなければならぬ」のだった。死者を追悼するしめやかな空気のなかで聞き書きすることには抵抗があったが、彼らは平気なようだった。私を紹介し、あちこちで聞き書きをはじめようとする。

ひとりの聾啞の人物が、近寄ってきて何か言おうとしている。そばにいた人が通訳を買って出て説明するところによると、彼はオウエレ・ムゴ (1945 年 5 月 7 日生まれ) といい、オボス＝オブンビ邸のすべての鍵の管理を任されていたそうだ。興奮して身振り手振りでいろいろ教えてくれようとするのだが、残念なことにあまりよくわからない。両手を手錠に擬してがらりと合わせ、地面でしきりに何かを書いて、泣く仕草をした。「17/02/1977」。1977 年 2 月 17 日。オボス＝オブンビがカンバラで亡くなった日である。

この日の帰り道、私はコロブディでオブンビ家の力を改めて示すかのような象徴的なものを目撃した。それは、高さ 5 メートルほどもある巨大な墓だった (写真 10)。オボス＝オブンビの父セム・コレ・オブンビのものだという。

その隣には、その父であるオボ・コレ (Obbo Kole 異名は Ogweyo、?-1947 年 6 月 7 日) とその妻ニヤゴリ (Nyagoli 異名は Lipya、?-1955 年 6 月 13 日) の墓がある。なめらかな大理石の墓石には、19 世紀末から 20 世紀初頭までのオボ・コレの戦士としての業績を称える言葉が刻まれている。

Obbo Kole (Ogweyo) of Niirenja clan born in the last century and died on 7th, June, 1942. He was a warrior and together with his elder brother Otiti Kole took part in the various wars fought by the Jopadhola (Badama) during the last century and during the early part of twentieth century before the British over-powered the eastern part of Uganda and put it under their rule. He was the father of the late Semu K. Ofumbi.

May the almighty God rest his soul in eternal peace.

The tomb was constructed by his grandson, A. C. K. Oboth-Ofumbi and his family on 2nd Jan. 1965 and reconstructed on 18th Dec. 1976



写真9 1976年に建て替えられたオボス＝オフンビの祖父、オボ・コレの墓

なにより5メートルの十字架は周囲を圧していた。

この地域には、生前功績をあげた成人男性には埋葬の後数年後に行われるルンベ儀礼 *lumbe* という盛大な宴会を伴う儀礼がある。そのなかでもとくに特筆すべき「偉大な人物」に対してのみ、さらにオケロ儀礼 *okelo* が催される。これらの儀礼は、生前の人物を讃えるとともに死霊が災厄をもたらさないように慰撫するために行われる²³。墓の建てかえは、こうした契機におこなわれたものではあろう。

こんな巨大な墓碑は見たことがなかった。おそらくカンパラのウガンダ教会の本部ナミレンベ教会にもないだろうと思われた。後に確認したところでは、この墓は1965年と1971年(写真11)、1976年の三回建てかえられたという。二回目の建て替え儀式の冒頭を飾ったセム・K・オフンビ記念チャペルの定礎セレモニーには大統領になってまだ3ヶ月のアミンもヘリコプターで出席した(写真7および12)。オボ・コレの墓も1976年に同時に建て替えられていることがその大理石の墓碑銘からうかがわれる。自邸の建造もこの年だったという。

思えば彼は、そのキャリアの節目ごとに墓を建てかえている。1965年は、当時オボテ内閣(大統領はムテサ二世)の内閣総理大臣室の秘書官長だったとき。本稿の終盤で触れることだが、このとき彼は東部の協同組合への移動を申し出ている。

また1971年は、国防大臣に就任直後で後から考えても彼の権力の絶頂期である。トロロ県に兵舎を誘致し、チャペルもこの年に建造された。

そして1976年は、死の前年であり、そろそろ彼の周囲をきな

²³ この意味では、この地域の生者と死者とのかかわりは、池上良正氏の提唱する崇り一祀システムに近い。本稿では触れられないが、それとセットになる穢れ一祓いシステムで説明できそうな儀礼も多く見られる。池上良正, 2003, 『死者の救済史—供養と憑依の宗教学』角川書店、参照。

臭い霧が漂いはじめた頃であった。

現在のセム・コレ・オフンビの墓碑には、大理石の墓碑銘がなかった。設置された形跡はあるのだが、外されているのだ。自転車で通りかかった近隣住民によれば、「何度とりつけても、誰かが持っていってしまう」。

この誰かが、オフンビ家に悪意をもっていたらうことは、容易に想像がつく。この地域では、邪術の一般的な方法の一つに、墓石に手を加えて行くものが知られているのである。一般に病気などで施術師にかかっても、占いの結果、墓がセメント加工されていない、とか、壊れかけている、という理由で祖霊が祟って子孫に病がもたらされる、と判断されることはよくある。墓石に手を加える邪術は、それを逆手にとって祖霊の祟りをその子孫たちに意図的に発動させる技法なのである。



写真10 1976年に建てかえられたセム・コレ・オフンビの墓



写真11 1971年のルンベ儀礼 *lumbe* の際に建て替えられたセム・コレ・オフンビの墓 オフンビ家蔵



写真12 1971年4月25日、セム・K・オフンビ記念チャペル
 定礎式のひとこま。オボス＝オフンビ（前列左から3人目）と
 アミン大統領（同4人目）オフンビ家蔵

私は、度重なる壁に当たって調査が頓挫したこともあり、少し目先を変えて広域調査を始めた。

クラツォラ神父の調査に協力をしたのは誰だったのか。『パドラ』の資料は誰が収集したのか。

コロブディ村の議長ヤイロ氏からは、『パドラ』のもととなる調査は父セム・コレ・オフンビの代から実施されていた、と聞いていた。死後に残された資料をまとめ、出版にこぎつけたのがオボス＝オフンビだということだ。英国の出版業界への紹介は、宣教師がなかだちしたという。その時代に、協力者なしで単独で調査を行ったとは考えにくい。どこかに協力者の記憶や痕跡が残っているのではないだろうか。手がかりは、読み書き能力と、キリスト教である。ある時期までこれは重なり合う部分が多かったことは容易に想像がついた。出会った長老に、かつて評判のエリートたちの名前を聞いてまわり、リストアップする日々が続いた。何人かのキーパーソンが浮かびあがってきた。私と助手が「地域の偉人」と呼んだ、ヨナ・オチョラ、ゼファニア・オチェン、ミカ・オマラ、アサナシオ・マリンガ、ヨナ・オウォリ、オライアス・オティレ、セバスチャン・オラッチ、サウロ・オカド、オボニョ・アフリカ、テフラ・オロウオなどがそれである²⁴。

④ゼファニア・オチェンの墓

²⁴ 彼らは、地域史の綺羅星のような存在であり、あるいは公式文書にはその名があるはずだと思っただけで、脱中心化政策の影響もあってトロロ県に送られた文書は、建物が建築中で利用できなかった。方針もなくエンテベの政府文書館を訪れたが、オボス＝オフンビの文書はまだ軍にあり、この時代の人物の資料を探するのは、雲をつかむような話だった。口頭で得られる情報にたよるしかなく暗中模索のまま、「地域の偉人」のリストは何度も書き直された。

訪れることになったのは、オボス＝オフンビの『パドラ』の「序文」にも謝辞が記されている、ときのサザ・チーフ（郡のチーフ：saza はガンダ語）の屋敷である。ここは現在でも「富貴」とでも訳すべきムブガ mbuga の異名で呼ばれる。

屋敷の主だったゼファニア・オチェン（Zefania Ochieng 1904?-1964年11月30日）は、植民地時代に名をはせた行政官である。彼の生前の履歴を未刊の記録「パドラのコヨ・クラン」²⁵から辿ってみよう。キデラ村にルボンギ準郡のチーフ、サムウィリ・ディンガの私設秘書、イエコニヤ・オブルの子として生まれた。1918年8月4日にサムウィリ・ナムイエンガにより受洗。ルボンギ小学校（1922-1928）、ナマリ高校（1928-1934）を経て、キングズ・カレッジ、ブド（1934-1935）へ進学するが、キリスト教の道に転じ、リラのボロボロ村で信徒奉事師となり、キソコに配置替えとなる（1936）。キソコでは、キソコ小学校の開校に尽力した（1937）。その後、すすめがあってプワラン教員養成校（1938-1939）を経て教師の資格をとり、キソコ小学校の校長を1948年まで務め、当時キソコを地盤としていた白人宣教師レヴランド・ランプレーを支えた。この当時彼の下で働いていた教師の一人がセム・コレ・オフンビである。生年もともに1904年頃とされているから、いわゆるエイジメイトとして儀礼的、社会的に近い関係であったことが想像される。校長であるオチェンには、1947年から1948年にこの地を襲った飢饉²⁶の際も変わらず開校していた功績が認められ、当時のイギリス国王ジョージ6世から表彰状が贈られている。

その人格はきわめて厳格であり、生涯一教師として振る舞った。その態度は、準郡や郡の長となっても変わらなかった。公衆衛生に関しては便所や（水浴びのための）浴室の設置、寝るための小屋を台所や家畜小屋とは別棟にして屋敷のなかを常にきれいに保つこと、村の道路を維持するために自助団体を組織して毎週整備するなどの政策を打ち出し、それをかなり強硬に推し進めた。

地域をたびたび襲った飢饉に関しても、対策を立てた。各屋敷の穀物倉にシコクピエを蓄えさせ、チーフの許可がなければ触ることのできない緊急用のジャガイモとキャッサバの畑をつくらせたのである。現在パドラ（「アドラの土地」の意）の独自の景観を形作っているバナナの葉が生い茂る村も、彼の計画した植樹によるものであった。

これらの事業は西ブダマ県をウガンダ東部州（現在州制は廃止）のモデル地区に押し上げ、1956年の10月にオチェンは、郡特任チーフに任命される。

これらの事業は多くの人々に歓迎されたが、なかにはこれを圧政ととらえる人々もいた。また、自らが働いていたアングリ

²⁵ Owori, Samuel F. 1996, The Koyo Clan of Padhola, Tororo, Uganda, unpublished, mimeo, pp.58-62.

²⁶ 前出の「マウエレの飢饉」とは別。なぜならば、セム・コレ・オフンビは1946年には教会から身をひいているからである。

カンのミッション・スクールとのつながりからアングリカンを重用する傾向もあった²⁷。1960年1月16日から22日にかけて起こったルウェニ・アビロ (Lwenyi Abiro 「棍棒を携えた闘い」の意) と呼ばれる暴動では、彼の屋敷が攻撃対象のひとつとされたのである²⁸。

その後1960年2月ブケディ県の事務総長補佐に任命され、ムバレ県で職務に就き、1961年コロニアル・チーフ・メダルを授与。1961年5月と1963年1月、エンテベのレンサミジで地方行政官コースを履修している。

独立とともに行政機構が変わり、事務総長補佐は管理事務長官補佐役に改称され、オチェンは最初のブケディ県管理事務長補佐役の職に就き、病を得て1964年11月30日に首都カンパラのムラゴ病院で没するまでその地位にいた。このようにオチェンは、初期の現地人宣教師として、教師として、また行政官としてその評価と批判を一身に浴びていたようである。

後にオボス＝オフンビの実弟であるジョン・オティティ教授は、オチェンの家と、われわれオフンビの家は、パドラではともに毛嫌いされている。子供を通学させる、という教育とか公衆衛生、道路の整備など、普及させるためにかなり強く説いて回ったからだ、と述懐した。

残念なことに、「パドラのコヨ・クラン」は、『パドラ』については沈黙していた。

現在彼の遺体は、キデラの自宅の庭先の墓の下におさめられている。その造作からしてつくりかえられているに違いないが、おそらくはこの墓は当地で最も早くにできたキリスト教風の墓のひとつだろう²⁹。

セメントで固められた墓石の上には、慎ましやかな十字架が浮き彫りになっている。高さ40センチほどのちいさな十字架の墓標も建っていたようだが、壊れていた(写真13)。現在ではそうした被害を防ぐために墓の周囲に煉瓦づくりの小屋が建造され、扉には鉄製のかんぬきと南京錠がかけられている。セム・コレ・オフンビの墓碑銘が持ち去られてしまう、という話を思い出した。ここにも私はエリートに対する呪詛の痕跡を認めたような気がした。オボス＝オフンビと同じくアミン政権の閣僚

だったファビアン・L・オクワレ Fabian Luke Okware (1929-?)³⁰の墓を訪れたときも、屋敷の中庭にあった墓は同じように頑丈な小屋の中に安置されていて、鉄の扉とかんぬき、そして南京錠にまもられていたのである。

その後、リストを絶えず修正しつつ、つてを辿り、長老たちの記憶に残る偉人たちの尋ね歩いた。多くは不明で、わかっても既に亡くなっていた。



写真13 ゼファニア・オチェン (1904-1964) の墓



写真14 2010年現在のゼファニア・オチェンの墓

²⁷ 1957年には、カソリック人口が75パーセントを超えていたにもかかわらず、伝統的首長を輩出していたニャポロ・クラン出身でカソリックのチーフは1名しかいなかったという。Yokana, Ogola, 1993, *The Bukedi Riots of 1960 with Special Reference to Padhola: A Study of Peasant Uprising against colonial Rule*, unpublished M.A.Diss, Dept.of History, Faculty of Arts, Makerere University, mimeo, pp.79-85 参照。

²⁸ ルウェニ・アビロについては、拙稿(梅屋 1999、「起源伝承から『棍棒を携えた闘い』まで—ウガンダ・パドラにおける歴史と記憶」官家準編『民俗宗教の地平』413-431頁、春秋社、413-431頁)とYokana前掲論文に詳しい。とりわけ後者は、暴動全体の流れに焦点を絞ったこの地域の未刊の論文の中でも優れたものである。

²⁹ CMSがパドラに常駐するようになったのは1925年のことである。

⑤ゴドフリー・オボス＝オフンビとふたりのムゼーMzee(長老)事態が急展開したのは、2001年9月5日のことである。

その日、私はナイロビ経由でウガンダに入るはずの人物と待ち合わせをしていた。トロロ市街地では電子メールを比較的スムーズに送受信できるのは、のちに友人となるデヴィッド・オクルット氏が営んでいる事務所だった。今はトロロ市街地には複数のインターネット・カフェがあるが、まだ端末の数が少なく、送受信を代行してくれるサービスだった。そのころインターネット・カフェを開く夢を私に語ってくれたオクルット氏は、

³⁰ 私の助手は、彼もアミンに殺害されたと信じていた。いささか大げさな言い方をすれば、一時期は、閣僚経験者や大立者の死因は「アミン」だったのである。

現在ではそのビジネスをマラバで営んでおり、オスクル準郡議会議長として活躍している。

当時のウガンダでは、メールの送受信は通常の電話回線だった。停電や電話回線にちょっとした事故があるとメールは不通となる。私はある人物との待ち合わせの日こそなえ街に出たのだが、その日も何らかの原因でメール不通の状態になっていた。本人はCPUを持って国境のマラバまで行き問題を解決するという。私はオクルット氏のすすめで、当時トロロ市街地にあった英字新聞『ニュー・ビジョン』紙の事務所を訪ねた。私の後ろから同じ用件でひとりの人物がついてきた。私が、スタッフに問題を告げると、残念なことにこの事務所でも事態は同じだという。私とその男性は、同様に困ったものだね、と肩をすくめた。

同じ立場でもあるし、こちらは日本人だから珍しかったのかもしれない。自己紹介をしあって驚いた。

彼はゴドフリー・ヨラム・オティティ・オボス＝オブンビと名乗った。ニヤマロゴの屋敷に母とともに住む、オボス＝オブンビの息子だったのだ。1995年までロス・アンジェルズに亡命していたのだという。『ニュー・ビジョン』のスタッフは黙ってビクターズ・ブックを差し出した。

彼の紹介で、私は二人の長老に話を聞くことができた。ひとり、ヨナ・オコス元大主教、もうひとり、ウィルバーフォース・カブル氏であった。



写真15 元大主教ヨナ・オコス (1927-2001)

2001年9月11日にまずヨナ・オコスを訪問した。彼の所在はすぐわかった。トロロ市街で「シェパード・レストラン」というレストランを経営し、その二階に隠棲していたからである。体調がすぐれないとのことだったが、娘さんが当人に問い合わせると、会ってくれるとのことだった。ヨナ・オコスはアメリカのバージニア州、リーズバークの聖ジェームズ教会に亡命しており、1979年4月アミン政権が崩壊すると戻ってきた。依然として自分がブケディ主教であることを知り、そのまま教会のつとめを続けたという。1984年1月、ウガンダ教会大主教にえらばれ、11年間その地位にいた。

1時間足らずの短い時間だったが、ここでの話は多岐にわたる。

オボス＝オブンビとはともにムランダ出身、子供の頃は近所に住んでおり、その頃からの友人だそうだ。

残念なことに、予期したとおりのカソリックとの縁は薄く、クラツォラ神父の名前は知らなかったし、『パドラ』のもととなる資料を集めたのも誰か知らないようだった。今思えば、失礼な質問もいくつかあったかも知れない。ここでは、オボス＝オブンビの経歴について「オボス＝オブンビは、神学者になりたかった。しかし、父の死でそれを断念したのだ」という証言が得られたことだけ指摘しておこう。オボス＝オブンビの死につながる政府転覆計画の噂についても、彼は否定した。

のちに新聞の特集記事で知ることになるが、事件の前日、オボス＝オブンビと主教だったヨナ・オコスはカンパラにともに泊っており、オボス＝オブンビに会議に出席するな、と助言したとのことだ。

帰国後ゴドフリーが電子メールで教えてくれたところによれば、彼はその後体調を崩し、9月27日に首都カンパラにあるムラゴ病院で亡くなったそうである。



写真16 元ウガンダ教会大主教ヨナ・オコスの墓

9月20日、あと5日の滞在予定日を残して、私はトロロのオグティ農場の向かいにあるカブル農場を訪れた。

「まず、はじめにはっきりさせてほしいことがある」私が手渡した協力を要請する趣旨の手紙を読み終わると、老人は薄い色のサングラス越しに私を凝視した。「この調査計画を政府は承認しているか、ということだ」調査許可について誰何されたのはウガンダに来て初めてのことであった（現在までも最初で最後である）。おそるおそる調査許可証を差し出す。「オボス＝オブンビの本はアドラ民族についてまとめたものとして最初のものであるから、その著者についても知りたいのです」と付け加えた。

老人はしばらく調査許可証と手紙を見比べていたが、やがてとつとつと、しかししっかりした声で話し始めた。

「持病があつてね、血圧も高い。このあたりではお金があるとすぐ肉を食べる。それがいけないのだと思うが…」どうやら

インタビュー前の審査はパスしたようなのでほっとした。「私の名前はカブルという。フルネームは、こうだ」おもむろに私の大学ノートとペンを取りあげ、震えてはいるが力強い筆跡で「フルネームは、ウィルバーフォース・チャールズ・エドワード・カブル＝オウオリ」と書いた。「オボス＝オファンビの父、セム・コレ・オファンビは、私の義父なのだ」と意外なことを語った。

話を総合すると、当時教会附属の小学校で働いていたセム・オファンビは、何らかの理由（貧困ともいわれるが、正確なところは現在も不明）で養育ができなくなった父親に代わり幼カブルをオボス＝オファンビとともに育てたようである。「セム・コレ・オファンビは私を、キングズ・カレッジ・ブド³¹に入れてくれた。私がそこで4年生を終えるころ、学校に警察が募集にやってきた。当時はそういった方法で新人を募集していたのだ。私は入ることにして、警官になった。最後の役職は、副警視総監³²だ」

いったん応ずるとなるとこの老人は実に協力的だった。オボス＝オファンビの履歴についても非常に詳しく語ってくれた。さすがに家族だけあって、年号こそあまいだが細部にわたり確信をもって証言する。

この段階で私は彼の最初の職が半官半民のブケディ協同組合だったこと、それに続いて地方行政に身を投じ、アチョリ県の副弁務官、ランゴ県の副弁務官を経てアチョリ県の弁務官となったことを知った。

履歴については、後に『ウガンダ官報』のマイクロフィルム³³によって跡づけることができた。しかしながらマイクロフィルムに収録されていたのはオボテ政権までのものであり、アミン時代のものは参照できていない。この点はジョーゲンセンの『ウガンダ現代史』³⁴によって補うことができた。

今になってインタビューを読み返してみるとオボス＝オファンビの最後の職を国防大臣だとカブルですら信じていたのが印象に残る³⁵。

「パドラ」という本の材料はセム・オファンビによって収集され、息子オボス＝オファンビによって出版されたのだ。オボス＝オファンビはここパドラでも初めて先を読むことができた人だ。ニイレンジャ・クランの人だ。私はいまニイレンジャ・クランのリーダーだが…ニイレンジャ・クランは常に先へ先へと人々をリードするクランで、他の追随を許さないのだ」と結んだ。

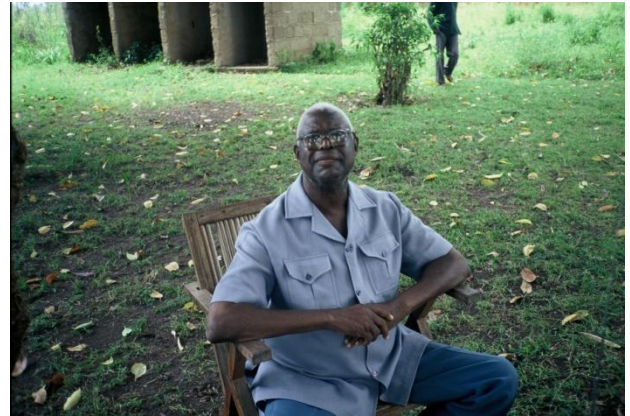


写真17 ウィルバーフォース・チャールズ・エドワード・カブル＝オウオリ（1927年11月24日-2002年11月2日）

翌2002年、インタビュー資料の正誤をただしてもらおうとカブルを再び訪れた。カブルは留守だった。ムラゴ病院に入院しているという。

11月3日にゴドフリーに電話をかけたおり、カブルが亡くなり、自動車で遺体をムラゴから自宅へ搬送中であることを知った³⁶。4日にイキロキ儀礼（*yikiroki* 埋葬儀礼）が執り行われた。

警察でのつながりの仕事とTASO³⁷トロロの初代議長でもあるカブルの生前の人望を反映して、数千人もの人が集まった。警察官も数十人参列していた。

アドラの「王」モーゼス・オウオリも弔辞を読んだ。「王」は1998年、アドラ・ユニオン³⁸の選挙で選ばれたが、カブルはその最終的な候補者4人のうちの一人だった。伝え聞くとところによると、自分はもう高齢だから、他の候補者に入れるように「運動」したという。その身の引き際の潔さに人びとはかえってカブルへの尊敬を新たにしたという。

カブルの墓碑には、「ニイレンジャ・クラン最初のクラン・リーダー」と刻まれている。

³¹ King's College, Budo は、プロテスタント系の王立名門校。

³² 正確には彼は、AACP: Assistant Actiong Commissioner of Police Force in Uganda と言ったのだが、それは現在の AIG: Assistant Inspector General of Police に対応するという。

³³ Uganda Gazette 1958-1970, Microfilm, New York Public Library, 1939. 慶應義塾大学三田メディアセンター、および国立民族学博物館蔵。

³⁴ Jorgensen, 前掲。

³⁵ 実際には註2で言及したように、国防大臣ポストははじめての3年間だけである。

³⁶ アドラ民族では、どこで亡くなろうと遺体は搬送されて自宅の屋敷の片隅に埋葬するのが普通である。そうしないと、死霊 *juogi* の祟りを招くともいわれる。

³⁷ The AIDS Support Organization の略。1987年ウガンダに設立。エイズへの感染予防と感染者およびその家族の QOL を向上させることを目的とする。

³⁸ もともとアドラ民族は世襲でない首長が擯擯していたようだが、文化振興団体の名目でユニオンを構成した。政府への陳情やさまざまな優遇を期待してのことである。



写真18 埋葬前にカブルの遺体の前で遺族がその死を悼む。手前にある写真はオボス＝オフンビ邸の応接間に飾られていたものである。遺体とともに埋葬された。



写真19 2010年現在のカブルの墓



写真20 「最初のニイレンジャ・クランのリーダー」と刻まれた墓碑銘

⑥レヴランド・キャンノン・ミカ・オマラ

無為に思えた「地域の偉人」のリストづくりだったが、往時を知る数多くの長老たちに会えたことは、このうえもない収穫だった。なかにはビルマ戦線で日本軍と戦った、という老人も

いた。ほとんど視力をうしなっていたが、「当時の日本兵と文通がしたいからさがしておいてほしい」と私に頼んだ。約束を果たす前に彼も逝ったようだ。

数え切れない長老たちのなかでもここでとくにとりあげねばならないのは、レヴランド・キャンノン・ミカ・アンドリュウ・オマラ (Reverend Canon Micah Andrew Omala 1919年3月19日-2007年3月31日) だろう。はじめからリストの筆頭にあげられていたのだが、しばらくの間は、居所がつかめずにいた。しかし、2002年にヨナ・オコスの娘エディスを尋ねたときに、居所を知ったのである。

なにしろ、彼はセム・コレ・オフンビ、オボス＝オフンビ双方の葬儀を執り行った人物なのだ。それだけではなく彼は『パドラ』のもとになる資料収集の中心メンバーのひとりだったのである。

彼の話では、資料収集をはじめたのはオボス＝オフンビ自身であり、彼とキャンノン・ヨナ・オチョラ (出身はマウンド)、サウロ・オカド (出身はムランダ)、アンドレア・オボ・オゴラ (パジュエンダ)、セバスチャン・オラッチ (センダ) がそれを手伝ったという。この指摘は、はじめセム・コレ・オフンビが先鞭をつけたものをオボス＝オフンビが引き継いだというカブルの認識とも、ムランダのヤイロ老の認識とも齟齬をきたすものであった。

しかしながらカブルとヤイロ老はともにオフンビ家に近い立場であり、ミカ・オマラは依頼され実行した側である。こういうことではなかろうか。確かにセム・コレ・オフンビはそういった調査の構想を持っていた。しかしながら、それはまだじゅうぶんなかたちをとっておらず、ごく身近な者にしか知られずにいるうちに彼は世を去った³⁹。レヴランド・ミカ・オマラは、オボス＝オフンビからの依頼で初めてそういった事業について知らされた。

(ちょうどお前が今もっているようなものだ、と指さしながら) 質問項目のようなものに沿って—クランの起源、音楽、信仰や双子儀礼、出産などの文化を調べてほしいという依頼だった。事実これらは『パドラ』の章立てとほとんどずれはない。

最初にこの依頼を受けた同僚ヨナ・オチョラは、レヴランド・キャンノン・レーベン・オミエリ・オチョラの父であり、2002年現在は引退しているが、最近までキソコの大執事だった。一員の一人アベデネゴは元大主教ヨナ・オコスの父であるオウオラ (洗礼名は失念したという) の兄弟である。

ヨナ・オコスとオボス＝オフンビはキソコ小学校で同窓だという。その後大臣と主教、立場は変わってもアドラ民族をひとつにしたいという希望が共通しており、常に親しい関係をたもった。

³⁹ FOMS では、オボス＝オフンビは、父のアドラ民族の歴史についての関心を引き継いだことを明言している。FOMS, p.3. 拙稿 (2002) も参照。

細部は今となっては想像するしかないが、すでに地域に根をおろしたキリスト教徒の紐帯が『パドラ』のもとになる資料を効率的に集めることを可能にしたといえそうだ。

当地を訪れた白人宣教師についても聞いてみると、ヘンリー・マンジャシ、レヴランド・ランブレー、カラブラブター、エミー、ウィラ…など次から次へとここを訪れた白人の名に言及し、それぞれがどのような関心を持っていたか、どのような活動をしていたかを語った。予想していたことだが、クラッツォララ神父の名はやはり挙がらなかった。これで、当初考えていたクラッツォララ神父との関係についての仮説は否定された。

また、彼はセム・コレ・オフンビの死因を住民がティボと考えていることにも言及し、実際に最期まで見舞った者としての立場から、「腹が異様に膨れていた。あれはキダダ *kidaada* (毒)だ」⁴⁰と断言した。彼の危篤はオボス＝オフンビが入学したばかりのキングズ・カレッジ・ブドでの試験を控えていることも考えてその最期まで伏せられていたという。

オボス＝オフンビの死のことも今もよく覚えているという。彼がバスで移動中、アドラ語放送の番組が突如途絶えてアジョレ *ajore* (挽歌) が流れてきた。そのことで彼はニュースが一言も読まれないうちにオボス＝オフンビの死を悟ったという。



写真21 クラン・リーダーの象徴であるスツール（ニヤスキスキ *nyathukithuki*）を持つレヴランド・キャンノン・ミカ・アンドリュウ・オマラ（1919年3月19日-2007年3月31日）



写真22 ミカ・アンドリュウ・オマラの墓（2010年現在）



写真23 ミカ・アンドリュウ・オマラの墓碑銘

⑦オフンビ邸と遺品

私がはじめてニヤマロゴのオフンビ邸を訪れることができたのは、2002年の10月9日、独立記念日のことだった。彼はパイナップルやにんにくをジンバブエなどに輸出する仕事をしており、その買付けで前日までアルアに行っていたとのことだった。アメリカでは航空機パイロットだったそうだ。

彼は自室から、『ニュー・ビジョン』紙と並ぶ国内英字新聞、『モニター』*Monitor* 紙を持ってきた。そこには、オボス＝オフンビが巻き込まれた事件（写真19）と回復を目指すオフンビ家の特集記事が載っていた⁴¹。

寝室に戻ると、こんどは段ボール箱いっぱいの、冊子と文書を重そうに運んできた。それは、オボス＝オフンビの残した1956年、1972年、1973年、1975年分の日記と、外遊した時の二冊のアルバムだった。要人に訪問された側がそういったアルバムを作成して贈るのが外交慣例であるらしい。またファイルのなかに束ねられた多くの文書。

まめにつけられた日記には、盟友であるもと大主教ヨナ・オコス、アドラの「王」となっているモーゼス・オウオリの名前や、オボテ政権時の閣僚だったジェームズ・オチョラの名前も

⁴⁰ キダダについては拙稿、梅屋潔,2008,「ウガンダ・パドラにおける『災因論』—*jwogi, tipo, ayira, lam* の観念を中心として」『人間情報学研究』第13巻、131-59頁参照。

⁴¹ *The Monitor*, 2002年2月16日号、pp.24-25 および *Sunday Monitor*, 2002年2月17日号、pp.26-27。

見える。1956年の日記が最も几帳面で、アミン政権時代に入ると走り書きが多くなり、文字も乱れている。

1956年11月8日の欄にはこう書かれていた。「フレッド・パーク氏とサウスオール氏というヨーロッパ人がニヤマロゴを訪問。ブダマ（アドラの他称）の歴史について。レヴランド・ヨナ・オコスらに伴われて。」下段のノート欄には、「フレッド・G・パーク氏とサウスオール博士」と書き直されている。几帳面さが窺われる。

ともに高名なアフリカ研究者である。オボス＝オブンビが地域の歴史や文化について資料を集めていることを伝え聞いての訪問に違いなかった。

この訪問前後に集めた資料が、冒頭註7で紹介した1957年1月マケレレで行われた報告につながったとみられる。タイプスクリプトは研究会の後サウスオールがオボス＝オブンビに送ったものだろう⁴²。



写真24 「大主教ルウム、大臣オブンビ、オリエマ殺害さる」と題する「モニター」紙の特集記事（The Monitor, 2002年2月16日）。ヨナ・オコスの顔も見える。

⁴² パークはこの研究会で、「チーフの新しい役割—アドラ民族の場合」と題する報告をしている。タイプスクリプトの書き込みを見る限り、オボス＝オブンビはプロテスタントとカソリックの対立を単純化したり、地方行政を無邪気に絶対視するパークの議論には賛成していない。

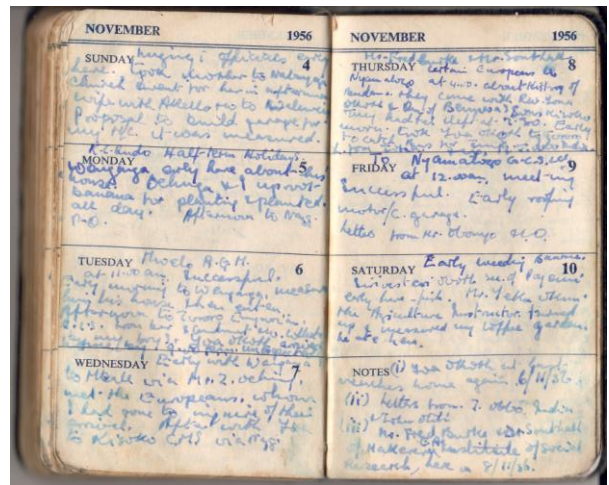


写真25 サウスオールらの名前が書かれた部分の日記

文書のなかには非常に興味深いものが多かった。アミン時代のものも多かった。

私は、そのなかのひとつの文書から、オボテ時代のオボス＝オブンビが総理大臣室から、もとの共同組合などに移動を希望していたことを知った。その移動は実現していないから、慰留されたのだろう。文書に書かれた理由は父の死後立て続けに2人のオジを失い、母の健康状態がすぐれないので、トロロ県カムバレか、自宅近くの職場にかえてほしい、というものだった。日付はウガンダを揺るがした「ゴールド・スキャンダル」あるいは「1966年危機」⁴³とよばれる事件の直前、1965年12月であった。

グワラグワラ村の噂でも、オボス＝オブンビ家では連続死があったことになっていたから、これで噂の裏がとれたことになる。

蛇に咬まれて死んだ人のことをゴドフリーはよく覚えていた。門の外で毒蛇に足を咬まれ、毒が体に回るのを防ごうと、人びとが足を「パンみたい」にスライスしたのだという。結局助からなかった。オブンビ家とは縁もゆかりもない男だった。グワラグワラ村にまで伝わる過程でオブンビ家の事件であるかのようには話がかわってしまっていたようである。

また、『東アフリカ紳士名鑑』⁴⁴のゲラのコピーもファイルさ

⁴³ 1966年2月、カバカ・イエッカ党書記長ダウディ・オチェンが国会で、アミンの口座に480,000UGX（ウガンダシリング。当時のレートで約£UK24,000に相当）もの膨大な預金があることを告発し、コンゴ東部から金と象牙を密輸入していること、首相オボテと閣僚2名が関係していると指摘したことに端を発する事件。この事件はオボテが憲法を改正して大統領に全権を集中させるきっかけとなった。

⁴⁴ *Who's Who in East Africa*, 1963, 1964, Nairobi: Marco

れていた。本稿で FOMS の略号で用いている資料も、このときもらったものだ。

目を引いたのはアルバムに貼られた多くの写真だった。それは英国外遊とインド外遊のときのもだったが、そのなかの一枚には、アミンとともに大統領らしき人物と写っている写真もあった。私はいまのところ、その容貌と時期から、当時のインド大統領ヴァラーハギリ・ヴェーンカタ・ギリ (Varahagiri Venkata Giri 在任は1969-1974) であろうと考えている (写真23)。おそらくはイギリスのものも、当時の政府要人だろう。当時の国防大臣イアン・ギルモア (Ian Gilmour 1926-2007) の顔も見える。

後に借りだしたアルバムからは、手塚治虫のキャラクターのモデルにもなったという、イスラエルの国防大臣モーシェ・ダヤン⁴⁵と一緒に写ったものも発見された (写真24)。



写真26 政府専用機でヒースロー空港に降り立つ オフンビ家蔵



写真27 ロンドン外遊中のオボス=オフンビ オフンビ家蔵

Surveys.

⁴⁵モーシェ・ダヤン (モーシユ・ダイアン, משה דיין, Moshe Dayan, 1915年5月20日 - 1981年10月16日)。



写真28 中央の人物は、当時のインド大統領と思われる オフンビ家蔵



写真29 ダヤンとオボス=オフンビ オフンビ家蔵

⑧オボス=オフンビの墓

別れ際にゴドフリーは、私をオボス=オフンビの墓の前に案内してくれた。

そこに眠っているのは、アルファクサド・チャールズ・コレ・オボス=オフンビ⁴⁶。1932年7月12日にトロロ県トロロ市街地のはずれアグルルで生まれ、その日ムランダで受洗。オボスとは、「耕したばかりの畑で生まれた子」の意である (ランギ民族におけるオボテと同名)。キソコ初等学校 (1942-7)、ムバララ高校 (1948-50)、キングズ・カレッジ・ブド (1951-3) ⁴⁷を経

⁴⁶ *Who's Who in East Africa*, E. G. Wilson (ed.) 1966, Nairobi: Marco Surveys. p. 87, に *The Uganda Gazette, African Research Bulletin* およびインタビューによって得た資料を加えた。

⁴⁷現地では父親の死のため卒業も断念したとするフォークロアもあるが、これはのちの悪評から遡ったものであろう。Kayondo, E. 2006, *Who is Who from Budo 1906-2006*, Kampala: New Vision Printing and Publishing Corporation, p. 95 に

「OBOTH Arphaxad, 1951年4A組入学、1954年6A組卒」との記載があるが、同書所収の出身者のうち「関係経験者」を挙げたリストからは漏れている。そのことと卒業年に異同があ

てマケレレ・カレッジへの進学を希望していたが、父セム・コレ・オフンビの死によりそれを断念。エンテベの協同組合アシスタント・コース (1954) 修了後ブケディ協同組合にアシスタント (1954-8)。ブケディ県弁務官室 (1958-60)。弁務官を補佐していたゼファニア・オチェンの助力を得て『パドラ』を出版したのはこのころである。エンテベのンサミジ地方行政職のコース修了後 (1960) に地方行政職に転じ (1961)、行政官 (1960) の資格取得後、アチョリ・ランゴ県の県副弁務官 (1月30日付け)。アチョリ県弁務官 (1963, 7月7日からはグル都市議会書記も兼任)。1962年の総選挙で大勝したウガンダ人民会議 (UPC: Uganda People's Congress) の党首で総理大臣となったオボテ⁴⁸ によって独立後 (1962年10月9日)、1963年12月10日には総理大臣室秘書官補佐 (1964)、同上級秘書官補佐 (1964)。1964年からは4月27日づけで兼任の他方行政省地方監査官、8月20日付け、内閣書記官、9月1日付け、総理大臣室上級書記官長補佐。総理大臣室書記官長 (1965)。国防省次官 (1971)。続くクーデター後のアミン政権成立で国防担当大臣 (1971)、国防大臣 (1971-1973)、財務大臣 (1974-1976、内務大臣と兼任)、内務大臣 (1974-1977) などを務め、大統領外遊時の大統領代行。

その間、妻のエリザベス・ミリカ・ナマゲンバとの間に、ルース・アブワ・ニヤケチョ・オフンビ (1956-1958, 2歳で夭折)、マイケル・ジョージ・ステイーヴン・セム・オフンビ (1957-)、サミュエル・ロバート・オボ・オフンビ (1960-)、エステル・グライス・ニヤゴリ・オフンビ (1962-)、ゴドフリー・ヨラム・オティティ・オボス=オフンビ (1964-)、エリザベス・エヴリン・プリシキラ・オリヤナ・オフンビ (1965-)、スーザン・サーラ・マンジュリ・アロウオ・オフンビ (1970-)、マーガレット・ジェーン・ナスワ・ニヤディボ・オフンビ (1972-) ら、3男5女をもうけた⁴⁹。

彼の経歴は突然途絶える。

1977年2月18日午前10:00、国営『ラジオ・ウガンダ』:「…政府スポークスマンは、鉱物水源大臣エリナヨ・オリエマ中尉⁵⁰、

る理由は不明。

⁴⁸ Apolo Milton Obote (1925-2005)。ランゴ生まれ。リラ中等学校 (1940-41)、グル高校 (1942-44) を経てブソガ・カレッジ・ムウィリ (1945-47)、マケレレ・ユニバーシティ・カレッジ (1948-50)、ロングアイランド大学優等、法学博士 (1963)、ケニアで労働者、書記、セールスマンを経て (1950-55)、ケニア・アフリカン・ユニオンを共同設立、ウガンダ人民会議 (1952-60)、UPC 結党、党首 (1960)、野党党首 (1961-62)、ウガンダ首相 (1962)、大統領兼国軍総長 (1966-1971)、クーデター後タンザニアに亡命した後大統領に返り咲く (1980-1985)。再び亡命後ザンビアにて客死 (2005)。

⁴⁹ オボス=オフンビ死後、6女クレア・ロビナ・アウォリ・オフンビ (1977-) が誕生。

⁵⁰ Erinayo Wilson Oryema (1917-1977) は、旧アチョリ県キラカ郡、アナカ・パイラ出身。グル高校、ブワラシ TTC、英国での研修を経て1939年、ウガンダ警察に就職。1940年 KAR に出向。1951年警部、1952年 (英国)、1958年 (英国)、1963

内務大臣チャールズ・オボス=オフンビ氏、そしてウガンダ・ルワンダ・ブルンディ・ボガ=ザイル大主教、ジャンニ・ルウム師⁵¹の死去を哀悼の意をもって公にした。昨日カンパラで起こった自動車事故に巻き込まれたために亡くなった模様。三人は、わが国を混乱に陥れる計画にかかわりがあるとして、モーゼス少佐の運転でカンパラ国際会議場から連行される途中だった。スポークスマンによると、三人が逃亡を図ってモーゼス少佐に暴行を加えたことが事故につながったという。モーゼス少佐は病院に運ばれ現在意識不明の状態…」⁵²。続報。三人が乗ったレンジ・ローバー (ナンバー UVW082) は、トヨタ・セリカ (UVS299) と衝突し、滑って横転。連れだされたときには三人は息絶えていた。『ボイス・オブ・ウガンダ』紙、ムスタファ・アディリシ司令官による三人の死亡確認の報告。カッフエロ医師は検死を拒否。信頼できる筋によれば、医師による検死は行われなかった⁵³。

…オリエマには、検死の結果、左側を中心に顔面左部分を含む頭蓋骨骨折が認められ、胸部および腹部の損傷が認められる。死因は、頭蓋骨骨折による外傷と内出血。ルウムは、両大腿、腹部、胸部、前額部の損傷、肝臓の外傷と著しい肺の損傷が認められた。死因は、肝臓および肺の機能不全。オボス=オフンビ

年 (英国・米国) での研修を経て、1963年副警視総監 (アフリカ人として初めて)、1964年から警視総監 (1964-1971) として辣腕を振るった。1958年には英国政府から植民地警察メダルを受賞。ケイ・アドロアとアミンが結婚時には花婿側の介添えをつとめたほどだったが、クーデター後は鉱物水資源大臣

(1971-1977) というそれまでのキャリアを全く生かせない閑職に追いやられていた。ケイ・アミン (旧姓アドロア) は、後にバラバラ死体となって発見されることになる。オリエマの息子ジェオフリー・オリエマ (Geoffrey Oryema 1953-) は、フランスを拠点に「アフリカン・オデッセイ」として歌手活動を続ける。代表曲のなかには父の霊を歌い込んだ “Spirits of My Father” というものもある。

⁵¹ Lanani Jakaliya Luwum (1922-1977) は、旧アチョリ県ムチウィニ出身。グル高校、1948年ボロボロ教員養成学校を経て教員。1948年受洗。1949年ブワラシ神学校。1955年執事。1956年牧師、1966年ウガンダ教会州事務局長、1969年に北部の主教となる。エリカ・サビティ (Erica Sabiti 1903-1988、大主教としての任期は1966-1974) の後を襲ってウガンダ人としては二人目の大主教 (第三代、1974-1977在任)。20世紀10大殉教者の一人として、アビイのウェストミンスター寺院にその像が置かれている。現地では聖人とみなしてトロロ県ナゴンゲラに聖ジャンニ・ルウム教会の建設がウガンダ教会第五代大主教ヨナ・オコスによって計画されたが、2001年ヨナ・オコスが他界した折には、まだ志半ばであった。

⁵² *African Research Bulletin*, Vol. 14, 1977-8, p. 4329 A & B, Wooding & Barnett 1980, *Uganda Holocaust*, London: Pickering & Inglis Ltd, p.102. Colin Legum, “Uganda”, *Africa Contemporary Record*, Vol. 9, 1976/77, pp. B380-1.

⁵³ 検死に立ち会ったアドラ人がいる。名をアチャンデリ・オクム。このこともアドラの地でオクムのティボの噂を再燃させる一因となった。

は、「鼻、両耳そして折れた左前腕部から出血が認められた。検死の結果、さらに中脳頭頂部の動脈より頭蓋内に出血があることがわかった…死因は脳内部の破損による頭蓋内出血」⁵⁴。

多くの人びとはこの事故を偽装であると考えた⁵⁵。『血塗られた国家—イディ・アミンの内幕—』の著者として有名な、アミン政権の元保健相ヘンリー・チェンバによれば、レンジ・ローバーはアミンの持ち物であり、セリカはアミン直属の諜報機関、国家調査局のものであるという⁵⁶。合衆国国連大使のアンドリュー・ヤングは即座に「暗殺だ」との声明を出し、ジェノヴァの国際法曹委員会 (International Commission of Jurists) も「自動車事故で死んだなどというまやかしでは誰もごまかすことはできない」と述べた⁵⁷。2月21日、ウガンダ教会初代大主教のレスリー・ブラウン博士は、大主教の両胸と口の中に弾痕を認めたという信頼に足る情報を持っている、と公式に発表している。

1977年2月17日(推定)オボス=オブンビ、没。45歳だった。

⑨おわりに

このような顛末である。偶然に導かれ、私はオボス=オブンビの遺品整理に力を注ぐことになったのだ。このような資料はアフリカのサバンナでは保存が難しい。既に風雨やつよい太陽光にさらされて劣化したものもあった。子供が計算練習帳にしてしまった日記もある。せめてデジタル化して劣化を食い止めようと考えた私は、遺族の希望もあってウガンダに調査に行くたびに聞き書きのかたわら、アルバムや新しい資料を借りだしてスキャナーで、あるいは業者に発注してデジタル化し、DVDなどの媒体で遺族にとどける作業を続けている。

ここ数年は、オブンビ邸の奥に置かれていた何本かの16ミリフィルムをDVD化(テレシネという)して、デジタル化する作業を続けている。試しに最初に借りてきたフィルムには、儀礼で墓のまわりで杖を持って踊るオボス=オブンビの妻エリザベス、ゴドフリー、そして sacrament を執り行う若き日のヨナ・オコスがうつっていた。

2009年8月には16ミリのフィルムを3巻借りだしてきた。そのうち1巻きをテレシネしてみると、アルバムと同じ、英国外

遊の際の彼の姿が音声付きで録画されていた。

この8月26日からの現地調査の折に16ミリフィルムを返却すると同時に、そのコピーのDVDを一枚、残してきた。

父の声は思い出せなかったが、ビデオで何年ぶりに思い出した、というゴドフリーの言葉に、ともすれば三面記事的な関心にささえられているとも思われかねない私の研究も人の役に立つことはあると意をつよくした。

もともと門外漢である私が、現代史、それも人物を手がかりにした地域史の研究に足を突っ込んだために、貴重な資料を順調に発表しているとはいいいがたい。デジタル化したアルバムは20冊にのぼる。どうやって公表するのがいいのか戸惑うばかりである。

冒頭で触れたように私はこれまで、妖術・邪術などをキーワードに世界観を主なテーマとして研究を進めてきた。しかし、この一連の調査で、人の終の棲家である墓をいくつも見て回る機会があり、生前インタビューで話を聞いた人びとが眠る墓もいくつも見るようになった。遺品整理のような作業を続けるうちに、知らず識らずのうちに、これまでは関心が希薄だった地域から見た世界史やその手がかりとなるモノや写真などへの関心も芽生えてきたように思う⁵⁸。オボス=オブンビに助言していたという予言者も既に亡くなっていた。私はその屋敷の片隅にあった墓石の写真を撮った。

『パドラ』をなぜあのタイミングで彼が出版したのかは、今も謎のままである。また、その時期からまったく別の路線の人生を歩むようになった理由もまだ釈然とはしない。今後の課題として残されている。

中心的な関心であるティポや予言者との関連は、固有名で語るのが微妙なところでもあり、限定されたところで口頭発表する以外は、詳細の公表を控えている。しかし、私が興味を覚えたのは国務大臣と死霊であり予言者であり崇りなのだから匿名ではあまり意味がない。遺族への配慮も含めて慎重に公にしたいと考えている。ゴドフリーが、「自分が知らなかった過去のことを知りたい」と好意的であるのは心強い。

オボス=オブンビは、1977年2月19日、アミンが派遣した数多くの軍人たちの見張るなか、父セム・コレ・オブンビを記念するチャペルの裏手に埋葬された。埋葬後も2ヶ月近く軍が駐留したことは、さまざまな憶測を喚起した。チェンバならば即座に、弾痕を誰かに確認されないためだ、というだろう。ゴドフリーによれば、死の3週間前自宅で飲んでいたときに、「私が死んだらここに埋葬してほしい」と指し示した場所だという。あたかも自らティポとなり、オブンビ家をまもろうとしている

⁵⁸ はからずも、このタイミングで考古学、歴史学の研究者たちの関わるこの共同研究会「身体と人格をめぐる言説と実践」に参加できたのは偶然とは思えない。彼らのモノに対する感性や執着から学んだものは多い。この共同研究に関わっていなければ、本稿のような問題関心を公にすることもなかったようにも思われる。

⁵⁴ “Post Mortem on Three Bodies,” *Voice of Uganda*, February 19, 1977, Vol. II, No. 43, p. 1, 3; “Archbishop Luwmi, Ministers Ofumbi and Oryema Murdered,” *The Monitor*, February 16, 2002, pp. 24-25.

⁵⁵ Kalyegira, Timothy N. (ed.), 1997, *The Uganda Almanac & Record Book*, First Edition, Monitor publication Ltd. Kyemba, Henry, 1977, *A State of Blood: The Inside Story of Idi Amin*. New York: Paddington Press, p.179-224.

⁵⁶ Kyemba, Henry, 1977, *A State of Blood: The Inside Story of Idi Amin*. New York: Paddington Press, p.191.

⁵⁷ Norton-Taylor & Brenda Jones, 1977, “Outrage over ‘murder’ of Uganda Bishop,” *The Guardian*, Friday, February, 18, 1977, p.12.

かのような⁵⁹。



写真30 オボス=オフンビの墓。電飾があるが現在は壊れている。

参考文献

[英文]

Burke, F.1957,

The New Role of the Chief with Special Reference to the Jopadhola, paper presented at East African Institute for Social Research, Kampala, Conference in January 1957.

Colin Legum, 1976/1977,

Crazzolaro, Joseph Pasquale, 1951,

Jo-P'Adhola, *The Lwoo Part II: Lwoo Traditions*, Verona, pp. 315-323.

Hayley, T. T. S, 1947,

The Anatomy of Lango Religion and Groups, Cambridge: Cambridge University Press.

Jorgensen, Jan Jelmert, 1981,

Uganda: A Modern History, London: Croom Helm Ltd.

Kalyegira, Timothy N.(ed.),1997,

The Uganda Almanac & Record Book, First Edition, Monitor publication Ltd.

Kayondo, E. 2006,

Who is Who from Budo 1906-2006, Kampala: New Vision Printing and Publishing Corporation.

Kyemba, Henry, 1977,

A State of Blood: The Inside Story of Idi Amin. New York: Paddington Press.

Oboth-Ofumbi, Arphaxad Charles Kole, 1960,

Padhola: History and Customs of the Jopadhola, Nairobi, Kampala & Dar es Salaam: The Eagle Press, East African Literature Bureau.

Ogot, Bethwell Allan, 1967,

History of the Southern Luo, Vol.1: Migration and Settlement 1500-1900, Nairobi: East African Publishing House.

Owori, Samuel F. 1996,

The Koyo Clan of Padhola, Tororo, Uganda, unpublished, mimeo.

Southall, Aidan, 1957,

Padhola: Comparative Social Structure, The paper presented at the conference, East African Institute of Social Research, January, 1957, unpublished, mimeo.

Uganda Gazette 1958-1970, Microfilm, New York Public Library, 1939.

Wilson, E. G.(ed.), 1963-1964,

Who's Who in East Africa, Nairobi: Marco Surveys.

Wooding & Barnett 1980,

Uganda Holocaust, London: Pickering & Inglis Ltd.

Yokana, Ogola, 1993,

The Bukedi Riots of 1960 with Special Reference to Padhola: A Study of Peasant Uprising against colonial Rule, unpublished M.A.Diss, Dept.of History, Faculty of Arts, Makerere University, mimeo.

[和文]

池上良正, 2003,

『死者の救済史—供養と憑依の宗教学』角川書店。

梅屋 潔, 1999,

「起源伝承から『棍棒を携えた闘い』まで—ウガンダ・パドラにおける歴史と記憶」宮家準編『民俗宗教の地平』413-431頁、春秋社。

———, 2002,

「民族誌家と現地協力者—ウガンダ東部パドラにおけるクラツォラ神父とオフンビ親子の場合」『哲学』第107集、233-260頁、慶應義塾大学三田哲学会。

———, 2007,

⁵⁹ 詳細は別項に譲るが、ここでは、遺族もそうした認識を共有しているようだ、ということを指摘することと定める。

「アチョワ事件簿—あるいは「テソ民族誌」異聞」『アリーナ』第4号、328-46頁、中部大学国際人間学研究所。

———,2008,

「ウガンダ・パドラにおける『災因論』—*jwogi, tipo, ayira, lam* の観念を中心として」『人間情報学研究』第13巻、131-59、東北学院大学人間情報学研究所。

新聞等

“Outrage over ‘murder’ of Uganda Bishop.”(Norton-Taylor & Brenda Jones), *The Guardian*, Friday, February, 18,1977, p.12.

“Post Mortem on Three Bodies,” *Voice of Uganda*, February 19, 1977, Vol. II, No. 43, p. 1, 3; “Archbishop Luwum, Ministers Ofumbi and Oryema Murdered.” *The Monitor*, February 16, 2002, pp. 24-25.

“Archbishop Luwum, Ministers Ofumbi and Oryema Murdered.” *The Monitor*, 2002年2月16日号、pp.24-25

“Idi Amin Murders Ex-bosom Friend Charles Oboth-Ofumbi.” *Sunday Monitor*, 2002年2月17日号、pp.26-27

その他資料

Africa Research Bulletin: Political Social and Cultural Series, London: Africa Research Ltd. Vol. 14, 1977-8, p. 4329 A & B.

The Form and Order of Memorial Service of Semu K. Ofumbi at Korobudi, Mulanda and The Service for the Consecration Dedication and Blessing of Semu K. Ofumbi Memorial Chapel St. Paul's Church, Nyamalogo, Mulanda, n.d. Entebbe: Government Printer.

“Uganda”, *Africa Contemporary Record*, London: Africa Research Ltd. Vol. 9, 1976/77, pp. B380-1.

Preservation of the relics:

A case of the late A. C. K. Oboth-Ofumbi in Tororo, eastern Uganda

This paper attempts to describe the events that sparked my interest in a specific subject of my fieldwork during this decade. I was particularly intrigued by the preservation of the relics of the late A. C. K. Oboth-Ofumbi (1932–1977), who was a Japadhola and served as the cabinet minister in Idi Amin Dada’s regime (1971–1979). While he was the head of the inner circle of the Amin, he was supposedly murdered by the Amin’s order eventually. Reflecting the ambiguity of his reputation, including that of being connected to a

tipo (spirit of the person who was murdered), *lam* (curse) and *jathieth* (soothsayer), he left many memories and objects in Padhola, which was his homeland when he was still alive. He was the author of the first ethnography of the Jopadhola; and a defence minister who brought the army barracks to Padhola for the first time. He was a pious Christian who built a large tombstone with a huge cross, presently functioning as a monument in this area, and a memorial chapel for his late father. Moreover, he was a family-oriented person who left a large inheritance and a modern mansion, and a methodical postcolonial elite, who left some diaries faithfully to depict his time. This is a narrative that reveals how I accidentally came to develop an interest in this figure. Visiting a large number of elders, his family and neighbours, I have been able to not only deepen my understanding of the religious beliefs and world-view among the Jopadhola, but also realize the importance of the relics left by Oboth-Ofumbi, especially those in his residence, and develop a keen interest in preserving them.

Keywords: Uganda, Amin’s Regime, A.C.K. Oboth-Ofumbi, preservation of relics, history from the local perspective